

イメージ

松江市立湖南中学校 三年 川上純礼

私には九十になる祖父がいた。祖父は認知症と腎臓の病気を患っていた。体調も日によって変化し、救急搬送されることも珍しくなかった。

病院から退院する日、私は母の手伝いで祖父を病院から施設に移すことになった。でも私は正直、一緒に行きたくなかった。大好きな祖父のことでもだ。理由は、私に祖父を支えられるかという不安。もう一つは、私のことを覚えてくれているかという不安の二つだ。祖父の中での私は、小学六年生くらいの記憶で止まっていたと思う。認知症になって祖父の子どもである父の名前でさえも忘れてしまったり、数年前に亡くなった祖母をまだ生きていると思い祖母に会いたいと言っていたそう。これまで私が祖父に会った時も誰か分かっていなかったみたいだ。私は祖父の病気と年齢を感じるのがすごく嫌だった。

退院は時間がかかった。祖父が私を指して「誰だったっけ？」と母に聞いた。私はやっぱりかと思った。私の苦しかった胸に何か刺さったような気がした。母が「純礼ですよ。」と声をかけると「ああ純礼ちゃんか。」と思出したか分からないような表情で話してくれた。私はすごくうれしかった。祖父に自分の名前を呼んでもらったのは何年ぶりだろうか。でも、名前を呼んでくれたのは、それが最後だった。母が「今年、受験生なんですよ。」と声をかけたら「おめでとう。」と返してくれた。認知症の祖父なりに考えてくれた返事だった。私はすごくうれしかった。これまで祖父に対して偏見を持っていたことに気づいた。

病院から出た時、母に「ここでおじいちゃんと一緒に待っていてね。」と言われた。「どうして？」と聞くと普通の駐車場では車椅子で入るのは狭いと言われた。私と祖父はロータリーでずっと待っていた。母がロータリーの奥の方で手を振っているのが見えた。すごく遠くだ。私はあんなに遠いところまで動かすのかと思いながら車椅子を押し始めた。その時、「一般の方ですか。」と警備の人に聞かれた。えっなんで？と私は思ったが、「はい。母が、車でそこまで迎えに来てくれています。」と答えた。私達が待っていたところは、タクシーで埋め尽くされていた。待っている私達をお客さんだと勘違いしていて動こうとしなかった。警備の人がタクシーの人に声をかけてくれた。母の車を私達の目の前まで動かしてもらった。そして祖父を車に乗せている時に「後ろから支えてあげてください。」と言われた。いくら九十歳でも自衛隊に入っていた祖父は体格が大きい。私と母では手がまわらないところを警備の人に手伝ってもらった。最後に「車椅子戻しておきますね。」と言って去っていった。

心が温かくなった気がした。今、思うとすごく親切な人だった。一瞬の出来事すぎて私はお礼を言えなかった。礼を言えなかったことを今でも、すごく後悔している。今では自然と何気ないことに感謝するようになった。

私は学校生活でふざけて「認知症」という言葉を使われていた時はすごく傷ついた。その時、私も少しだけ「認知症」という言葉に敏感になっていたと思う。私は真っ先に祖父のことが思い浮かんだ。患者さんやその家族も悲しくさせるような内容だった。遊び半分で使わ

れていたことがすごく悔しかった。認知症になっても祖父は優しくかった。祖父と過ごした日々はとても楽しかった。いつもの祖父を取り戻した時、楽しそうに甲子園を見ている姿が脳裏をよぎる。それから、一週間後祖父は亡くなった。大好きな祖父にはもう会えない。

元気な私達が、「認知症」という言葉をふざけて使うと患者さんやその家族、一生懸命治そうとしているお医者さんはどう思うだろうか。私の他にも嫌な思いをしていた人がいたはずだ。

「認知症」という言葉を安易に使わないで欲しい。今の私の願いだ。

「人権問題」と聞くとみんなは何を思い浮かべるだろうか。みんなが考える人権にお年寄りというカテゴリーは存在するだろうか。いつかは私達も支えてもらう側の立場になる。

無知なのが一番つらかった。でも、認知症の症状に対して勝手なイメージを持たれることもすごく嫌だ。正しい知識を持つことがよりよい社会に近づく大きな一歩になると思う。

最近私は介護や看護、車椅子に関わる仕事に関心を持ち始めた。世の中の人に正しく認知症について理解して欲しいと思った。そして、病院の前で私達を助けてくれた人みたいに親切な人でこの世の中がいっぱいになって欲しいと思う。そうすれば、自然とみんなに思いやりの心が生まれると思う。

将来、「認知症」について理解することさえも必要にならない。そんな私の理想の社会が一秒でも早く来て欲しい。